



## 琴未（ことみ）

---

二学期も終わりに近づいた日曜日、この町一番の繁華街を琴未と二人で並んで歩く。ちょっと前まではそれだけで針千本飲んだって痛くないぐらいにうかれていたものだ。だけど人間というのは本当に恐ろしいもので、今となってはむしろ、一緒に並んで歩いているとどこかの砂漠にいるかのように感じてしまう。

デパートのショーウィンドウに映し出された僕と琴未の体は、ちょっと手を伸ばすだけで届くような距離だ。手を握ったこともある。二週間と三日前。でもそれきり、ない。もしかしたら琴未は僕に愛想を尽かしたのかもしれない。それとも僕がもっと強引に行くことを待っているのだろうか。いやそれは勝手な想像だ。ここで僕がとんだ勘違いなことをしてしまったら、それこそ琴未に嫌われてしまうだろう。そんなことを考えながらガラス越しに琴未を見ていると、隣にいた琴未がため息をついた。

「もう修市って、そんなにじろじろ、やめてよ」

照れている感じではなかった。むしろ軽蔑の声色だ。僕の妄想の音が、唇を通して漏れてしまったのかとびっくりして、すぐに気がついた。僕と琴未を反射させていたデパートのガラスのそのさらに奥に、露出の大きな水着を着たマネキンが立っていたのだ。

「違う、違うよ、琴未。水着見てたんじゃない」

「そんなに必死に言わないで。周りに聞こえたら余計恥ずかしいじゃない」

違う。ほんとに違うのに。

信号が変わるとすぐに琴未は僕を置いてさっさと歩いていく。弁明の余地なし。ああ、男であるということは、なんと理不尽なことなのだろう。こんな感じできっと満員電車であらぬ疑いをかけられたりするのだ。自分の彼女ですら、粗野で野蛮なレッテルを乱暴に張りつける。僕は健全に琴未との将来を考えて憂いでいただけなのに。それすら許されないのですか、神様。

ふたりで喫茶店に入り、僕はアイスコーヒーを、琴未はマンゴーオレという僕にはちょっと理解しがたい飲み物を注文した。店内は驚くほど涼しい。

琴未とは付き合い始めて二ヶ月と七日。男のくせに細かい数字まで覚えているなど、自分でも思う。だけど覚えてしまっているのだからどうしようもない。僕はいったいなんのために日にちを数えているのだろう。

脱線したので話を戻すと、高一の終わりに僕が告白した。二年生になるときのクラス替えて、琴未と別のクラスになるかもしれないとあせったからだ（結局同じクラスになったけどね）。告白したとき琴未は「友達からなら」と言った。友達からって、いったいどこまでOKで、どこからはアウトなんだろう。確かなのは二人で映画を見に行くぐらいはセーフだということだった。

琴未が僕の目の前で、まるで僕がいることを忘れているかのようにとろっとした目で映画のパ

ンフレットを眺めている。このパンフレットというものの存在が僕には理解できない。明白な無駄づかいだと認識しつつも、琴未が「記念にね」なんて言うものだから、さすがに買わないわけにはいかなくなる。七百円。痛いなあ。

「ラストなんてすごい泣けたよね」

そう言って琴未は、マンゴーオレのストローに口をつける。

ラストというのは、主人公が思いを寄せる女の子が電車に乗って新しい町に向かうシーンのこと……だろう。それまでどうしても告白ができなかった主人公が、走る電車に向かって河原から野球ボールを投げるのだ。しかも彼が投げたボールが、なんと電車の窓から車内に入ってしまう！ 確かに彼は甲子園を目指すピッチャーであり、エースで四番だ。（しかしそれならなんでも許されるのか？） 電車に入ったそのボールを女の子が気づいて拾うと、ボールに「好きだ」と書いてある。

どこから突っ込んでやろうかと考えていると、琴未が言った。

「そういえば、おばあちゃんどうしてるの？」

突然の話題転換に僕は少し戸惑った。女子というのはどうして腰を据えて話さない。僕の映画への感想に興味はないということだろうかと思いつつ、僕は答えた。

「やばいかも」

「やばいって……そんなにひどいの？」

「このあいだなんか、線香、ほら仏壇に飾るあれだけど、あれを食べようとしちゃったらしくて」

僕がそう言うと、

「それってやばくない？」

と琴未の顔が近づいてきた。僕は努めて冷静に答える。

「だから言ってるじゃん、やばいって」

琴未がゆっくりと瞳を動かしてうつむいた。それを見ていて今日の映画のヒロインに、同じような仕草があったのを思い出した。琴未だって、その子に負けず劣らずとってもかわいい。

「大変だね」

「あ、大変だけど、施設に入れることになったから大丈夫だよ」

「しせつ？」

「そう。このあいだも話したけど、じいちゃんも腰が悪くて、ばあちゃんの面倒は見きれないんだよ。ばあちゃんをうちに連れて来るって話もなくはなかったと思うけど、うちにきたって平日

は誰もいないわけだし」

そこで僕はコーヒーを一口飲んだ。

今話してるのは、母さん方のばあちゃんのこと、僕が小学校を卒業するころから少しずつ様子がおかしくなり、今はほぼ百パーセントの純度でボケてしまった。線香の話も脚色なしの実話で、乾燥麺と勘違いしたらしく、熱湯で茹でていたところをじいちゃんが見つけたとのことだった。その話を聞いたときはもちろん驚いたけど、線香って茹でたらどうなるんだろうとそちらのほうが気になったりした。

普通だったら、母さんが介護することになるところなんだろうけど、母さんは、僕が小学校にあがった年に交通事故で死んでしまった。母さんには兄弟がいなくて、じいちゃんとばあちゃんが頼れる親戚は、僕たち以外に他にはいない。だけど、帰りの遅い父と、高校生の僕と小六の妹で介護するなんて無理な話で、ばあちゃんが施設に入ることになって僕は正直ホッとしていた。

「心配だね」

きれいに手入れの行き届いた眉を琴未がひそめる。琴未は他人の痛みを自分のことのように感じるができるらしく、ばあちゃんのことを話してはよくこんな顔をする。わざとらしいわけじゃないんで、いやな気持ちになったりはしないけれど、どうして他人のことをそこまで深刻に受け止められるんだろうと、僕は時々不思議に思う。

「そりゃあ心配だよ。けどさ、僕とばあちゃんは一年に一回ぐらいしか会わなかったんだよ。だから、お年玉もらう関係って言ったら言いすぎかもしれないけど、ばあちゃんがボケたからって特に何かがぐっとくるわけでもないんだよね」

「……修市の言い方ひどい」

もしも琴未が今の僕の立場だったら、夜な夜な涙を流し、食事ものどを通らなくなるかもしれない。琴未と比べると僕はほんとに薄情なやつだな、と自分でも思う。やっぱり琴未が正しくて僕が間違ってるんだろう。それでもやっぱり、僕は琴未のようににはなれない。

「でもさ、ばあちゃんと孫の関係なんて、今の世の中そんなものだって」

僕は苦し紛れに言った。

「わたしだっておばあちゃんとは一年に一、二回しか会わないけど」

「でしょ」

「でもわたしおばあちゃん好きだもん」

「いや、僕だって嫌いじゃないって」

思っている以上に、琴未が僕を薄情なやつだと思っているような気がしてきて、これでは今後の僕らの関係に支障が出てしまうと、僕は慌てて言った。好きとか嫌いとかそういうことじゃなくて、そういう判断ができるほどの付き合いがなかったというほうが正しいかもしれない。

琴未はまだ腑に落ちない顔をしていた。

「よく分かんないよ」

「とにかくばあちゃんは施設に入ることになったから、もう大丈夫ってこと」

「そんなもの？」

「そんなもん」

僕は力強く言った。だけど、この時の根拠のない僕の自信は、さほど時間の経たないうちに、なんともあっけなくさらさらと崩れてしまうのである。

## 我が妹、茜（あかね）

---

琴未とのデートを終えた帰り道。僕は、実りきった稲穂のように頭を垂れて歩いていた。

喫茶店を出た後ゲームセンターにでも行って、エアホッケーなどをしては「もっと手加減してよ」なんて琴未をぶんぶんさせて、プリクラでびっくりするぐらい寄り添うはずでいたら、突然、琴未のお母さんから電話がかかってきた。弟の塾が予定よりも早く終わったらしく迎えに行ってほしいとのこと。まさかと思ったけれど、弟思いの優しい琴未は「今度コーヒーおごるから」と言い残し、僕を置いてさっさと席を立ってしまった。琴未にとっての僕は、喫茶店で数百円で売られるような、そんな男に過ぎなかったのだ。

琴未と別れてからの記憶が断片的だったけれど、気づいたら海辺に立っていたとか、鬱蒼とした森の中だったとかそんなことはなくて、いたって普通に帰宅していた。毎日見ているはずの我が家の前で、しばし茫然と僕は立ち尽くした。

母さんが生きてるころに、父さんが無理をして購入した一軒家。小さな庭もある。おそらくローンは今も続いているのだろう。子どもがもう一人ぐらい生まれることを想定していたのか、じいちゃんたちと将来同居することを考えていたのか、いずれにせよ家族三人で住むには大きすぎた。

家にあがりリビングをのぞくと、妹の茜がソファの上に体育座りをし、スナック菓子を片手にテレビを見ている。茜の顔がテレビに照らされて白く黄色く慌しく明滅していた。来年から中学生になる妹の、こんな後ろ姿をながめっていると、兄としてはいささか不安にもなる。僕に気がついた茜が、あくまでテレビに向けている姿勢を崩さずに、口の中をもごもごとさせながら言った。

「おかえりい」

「お前そんなもん食ってばっかりいたら太るぞ」

「お兄ちゃんも食う？」

そう言ってゲラゲラと笑った。

「食うけどさ」

僕はそう言うとソファをひとつ飛びして茜の横に座り、スナック菓子の袋に手を伸ばした。

「父さんはまだ？」

僕がたずねると、茜は黙って首をふった。

実を言うと、今日はばあちゃんが例の施設に入る日だった。父さんはその手続きのために、休日だというのに朝から施設に出かけている。施設の場所のうちからそれほど遠くはない。大きな荷物の運び入れもないからそんなに遅くはならないはずだと言っていたけれど、今のばあちゃんは子どものように手がかかるわけで、予定よりも時間がかかっているのかもしれない。

テレビでは最近ブレイクし始めたお笑い芸人が出ている。それを見て笑う茜の口から、菓子のカスがぼろぼろと床に落ちた。いつものことだけれど、僕は茜の学園生活が思いやられた。

「面白いの、こいつら」

僕が聞くと

「うーん、いまいち」

と冷めた調子で言う。あんなに笑ってたじゃないか。

「ところでさ」

茜が体育座りを崩してあぐらをかき、僕のほうを向いた。

「琴未ちゃんとのデートどうだった？」

そう、茜は琴未のことを知っている。名前だけ。しかも「琴未ちゃん」などと図々しく呼びやがる。僕が琴未と付き合い始めたばかりのころ、僕のケータイの着信に「琴未」と表示されるのを偶然茜が見つけてしまい、カノジョだ、カノジョだ、と父さんにも聞こえるような声で囁し立てた。

「別に」

「別になに？」

「別に、ふつう」

「別にふつうなデートって、どんなデートなのかしら」

ほんとうに茜は日に日に、目を見張るほど生意気になっていく。僕が黙っていると、茜がふんと言った。

「じゃあ、質問を変えよう。ラブトレインどうだった？」

すうっとイヤな汗が僕の体から吹き出た。「ラブトレイン」は今日琴未と見た映画のタイトルだった。どうして僕たちがそれを見てきたことを知ってた、こいつは！

「なんで知ってるのかって？」

茜は僕の心の声が聞こえているかのように言う。その顔の憎たらしさといったら言葉では表現できない、というかしたくもないし、記憶から一刻も早く消し去りたい。

「昨日の夜、お兄ちゃんが使ったあとのパソコンの履歴に、ラブトレインのサイトが残ってたからさ。多分そうじゃないかなあと思って。当たった？」

「勝手に見んなよ」

まったく、ただでさえ今日のデートに満足できず、打ちひしがれて帰ってきたというのに、僕

はさらにどっと疲れた。

「で、どうだった」

興味深々に茜が聞いてくる。別に隠すほどのことではないので、

「サイアクだな、あれは」

と答えると

「だよなあ、サイアクだよ、あれは」

と茜が同調してきたので、僕は迂闊にもちょっと心が休まった。

「お前、見たの？」

「見てないけど、映画の予告を見ただけで、しけてんなあとは思ってたよ」

琴未みたいなタイプもいれば、茜みたいな女子もいるのだ。だけど、やはり兄としては茜のこういうところが、心配でないと言えようそになる。

「どっちが見に行こうって言ったの？」

「関係ねえじゃん」

と僕が言うと、急に茜が僕の腕をとって（しかもスナック菓子でギトギトの手で）

「おせーて、おせーて、お兄ちゃん」

とか言いだすもんだから、うんざりして「あっち」と僕は答えた。

「そっかあ、琴未ちゃんかあ」

そう言うと茜は声を殺して笑った。でもすぐに笑うのを止める。

「あ、念のために言っておくけど、ラブトレインが見たいって言った琴未ちゃんって、なんててかわいいんだろうと思ってむずむずしただけよ。お兄ちゃんのカノジョが私みたいなものじゃなくて安心した」

茜が僕のことを心配するというあべこべな事態に、こんなところで茜なんかと油を売らずにもっと有意義な時間を過ごすべきだと思い至って、僕は茜の菓子を片手でつかめるだけつかんで席を立った。

「どこ行くの？」

僕は返事をせずにリビングを出た。リビングの扉を閉めていても、テレビを見ている茜のバカ笑いが廊下まで聞こえてくる。その声を聞いていると、なんだか茜だけに留まらず世間一般の女子というものに対して幻滅してしまいそうになり、僕は慌てて階段を上った。



## 郷に入っては

---

夜の八時過ぎ、父さんが返ってきた。父さんは仕事のときよりも少し疲れた様子で「とりあえずシャワー」と言いながら僕らの前を横切った。

僕と茜は晩ご飯の準備にとりかかる。準備と言っても、父さんが帰りがけにスーパーで買ってきたにぎり寿司を広げるだけだ。先に食べてていいと言われたけど、僕も茜も夕方にスナック菓子を食べてたし、父さんを待つことにする。茜がお茶を入れるためにお湯を沸かし、僕はスーパーの袋から寿司を取り出した。時間が遅かったせいだろう、全部の寿司に三割引のシールが貼ってあった。

シャワーから出てきた父さんと僕たちはスーパーの寿司を囲んだ。三人で囲む三割引の寿司は、いつも以上に味が薄い。たつぷりとしょうゆをつけて口に運ぶ。こうしないとなんだか箸が進まなかった。茜のやつは、にぎりのネタをはがし、わさびを器用に取りのぞいて食べている。

「おばあちゃんどうだった？」

わさびのなくなったサーモンをほおぼりながら、茜が言った。

「元気そうだったよ。最近は意外と調子がいいらしい」

以前に、茜のいないところで父さんから聞いた話では、ばあちゃんは施設に入るのを嫌がっているということだった。やっぱり住み慣れた家を離れるのが嫌なんだろう。ポケてるとはいえ、まったく現状を把握できていないわけじゃなさそうだった。自分がどうされようとしているのか分からなくて、それでなおさら拒んでいたのかもしれない。でも、だからって他にどうしようもないだろう。

「じいちゃんは？」僕がたずねた。

「予定通り、明日じいさんのところに行って、最低限の荷物をうちに運び込む。明日からじいさんと一緒なんだから、ふたりともちゃんとまじめにしろよ」

実はそういうことなのだ。ばあちゃんが施設に入ることになって、じいちゃんをどうするかでことになり、結局うちに来るよう父さんが説得したらしかった。まあ、じいちゃんも腰を痛めてるから、一人暮らしをさせておくのは確かに何かと大変だとは思う。

だけど、突然同居人が増えるというのは、相手がじいちゃんとはいえ面倒な話だ。「ちゃんとまじめに」って言われてもどうすればいいのかよく分からないし、仮に分かったとしても正直なところこっちにはそんな気なんかさらさらなかった。それでも、じいちゃんがうちで生活するのは一時的なものらしいこと、それからあと二年もしたら多分僕は大学進学でこのうちを出て行くこと、これらを考えれば我慢できないほどではないかと、割り切るしかなかった。

「明日は朝から大忙しだな」

まるで忙しいことを楽しんでるかのようには、茜が言った。茜はじいちゃんと一緒に住むのを、嫌がってはいないようだ。むしろどこか楽しみにしているふしがある。単純に、人が増えてにぎ

やかになるとでも思ってるんだろう。こういうところや、わさびが食べられないところはまだまだ子どもだ。

晩御飯を食べ終わると、三人でさっさと片付けを済まし、僕は部屋に戻った。茜はもう少しテレビを見ると言ってリビングに残り、父さんはもう寝ると言って歯磨きを始めた。

部屋に戻ると、ケータイがちかちかと点滅しているのに気づいた。琴未からメールが届いていた。

『今日はホントごめん。でもラブトレイン超楽しかったね。また行こうね。ところで、明日の修市の予定はなんだったっけ？』

「また行こう」というのが「ラブトレインをもう一度見に行こう」という意味かと思ってぞっとしたけど、おそらく「映画に」ということだろう。

僕はベッドに腰掛けた。どうもこのメールからは反省の色が伺えない。イヤミのひとつでも返してやろうか、返事をしないでおこうかなどと試してみたけれど、小さな男だと思われるのは嫌なので返事を書いてやることにした。

『僕も楽しかった。ラブトレイン、マジ泣けたよ。明日は家族サービス。琴未は明日は朝から塾だよ。がんばれよ』

メールを送るとすぐに電話が鳴った。ディスプレイに『琴未』と出ている。鼓動が速くなってちょっとだけ自己嫌悪になり、少しだけ時間をおいて電話に出た。

「もしもし」

「寂しそうだから、電話してあげたよ」

「寂しそうになんかしてないよ」

「あらそう」

「そう」

「じゃあ、切ろうかな」

「ちょ、ちょっと」

電話口で琴未の笑い声が聞こえた。

「家族サービスって何なの？」

「明日からさ、じいちゃんがうちに来るんだよ」

「うちって修市の家に？」

「そう」

「おばあちゃんが施設に入るから？」

「じいちゃん腰が悪いし、じいちゃんの家から施設までも遠いしさ。それで明日は引越してわけ」

同じ屋根の下にじいちゃんと生活するってのは、頭で考えたところでよく分からない。今だって僕は、我が家でほとんどの時間を自分の部屋で過ごしているわけだから、大きな変化はないだろうけど。

「厳しく教育されたりして」

「バカ言うなよ、もう高校生だぞ」

「分からないよお。修市は子どもっぽいところあるし」

「どこがあ」

琴未がまた笑う。なんだか今日は、いや今日もか、僕は琴未に振り回されてばかりいるような気がした。

じいちゃんの話はそれきりで、あとは琴未の話を、弟を塾に迎えに行った帰りにアイスを食べたとか、晩御飯に嫌いなグリーンピースが入っていたとか、他愛もないことを聞いた。ケータイを切って時計を見ると、一時間近くも話していた。

リモコンでアンプの電源を入れ、ベッドに横になりながらマンガを読んでいると茜の声がドア越しに聞こえた。

「ちょっとお兄ちゃん、うっさいよ」

僕は横になったまま

「うっさくないよ」

と一蹴すると

「うっさいっつってんだろ、アホ」

と罵られた。そして部屋に戻っていく足音が聞こえる。お前にロックのなにが分かる、とこれは声に出さずにポータブルプレーヤーに切り替える。イヤホンを耳に指していると、ふと琴未の言葉を思い出した。こんふうにぐうたらしてたら、これからは茜よりも先にじいちゃんに怒られたりするんだろうか。まさか。あっちにはそんなこと言う権利なんてないんだし。こういうことは初めが大事なんだ。ガツンと。郷には従ってもらう。僕の自由が脅かされることはない。そんなことなどあってはならないのだ。

## 温泉街の祖父

---

翌朝、僕と茜は父さんの車でじいちゃんの家に向かった。三人そろって車で外に出るなんていづぶりだろう。茜がまだ小さいころは家族三人でドライブすることも多かったけれど、今となっては車の中での会話にも困ってしまう。

朝の車の中は光が充満し、小さな埃が四方に広がって見えた。そんなさわやかな朝とは裏腹に、僕の頭はグレーににごっている。朝にはめっぽう弱いのだ。茜はというと楽しそうに助手席から外を眺めている。いかにもご機嫌そのものって感じ。何がそんなに楽しいんだか。

じいちゃんの家までは高速を使って約一時間。県の郊外にあるこの町は、温泉地として知られている、と言えば聞こえはいいけど、温泉以外には特になんにもない取り残されたような町だ。情緒豊かというよりは、たださびれているだけだった。

高速のインターを降りると、湯煙が遠目に見える。こんな朝っぱらから風呂に入ってる人たちがいるのだろうか。田舎の年よりは風呂に入る以外に他に楽しみがないのかもしれない。裸のおじいちゃんたちが湯船につかり、会話を楽しんでいるような光景をテレビで見たことがあるけど、あんな感じだろうか。

緩やかな細い下り坂を町に向かって進んでいく。両脇の木々には青い大きな葉がうっそうとしていて、その重みで梢が柔らかく曲がっていた。窓を開けると、新鮮な空気が鼻を通り抜けて気持ちがいい。夏の日差しも、ここでは天然のブラインドにさえぎられ、やかましくない明るさだった。

じいちゃんの家には予定通りの時刻に着いた。（父さんは時間に厳しい人間なのだ）家の前に車を止めて降りると、車の音で気がついたのか、じいちゃんが玄関から出てきた。僕が物心ついたのが四歳として、それから十三年の月日が経つけれど、じいちゃんはまるで変わらない。自己主張の強いデコにはうっすらとシミがあり、頬骨は顔の輪郭を特徴付けるぐらい飛び出でて、丸まった背中が余計に体を小さく見せる。だけど腕や足は意外に太くてずんぐりとしていた。

人懐っこい垂れ目を大きくしながら、じいちゃんが近づいてきた。

「いやあ、修くんも茜ちゃんも久しぶりだねえ」

じいちゃんは僕のことを、今でも「修くん」と呼ぶ。いい加減止めてほしい。

「おじいちゃん元気だった？」

僕には絶対まねできない明るさで、茜がじいちゃんの前に行く。茜がじいちゃんの前につくと、ふたりは同じぐらいの背丈になっていた。じいちゃんが変わらなくても、茜や僕はどんどん変わっていく。

ふと、じいちゃんと目が合った。僕は黙って会釈をする。めったに会うことのないじいちゃんだから、どういうふうに話したらいいのかすら、それすら分からない。

「修くんも大きくなったなあ」

じいちゃんが僕を見上げて言う。じいちゃんの身長は僕の肩ぐら이다。いくつのときに身長が逆転したんだっけ。たしかにじいちゃんの言うとおりに、前に会ったときよりもじいちゃんのデコのシミがよく見えるようになっていた。

「お義父さん、おはようございます」と父さんが言うと、「彰信くん、二日も続けてすまんなあ」とじいちゃんが言った。

「なにをおっしゃるんですか。今日から一緒に住むことになるんですし、そんなこと気になさらないでください」

父さんがにこやかに言う。正直なところ、僕には父さんとじいちゃんの関係がよく分からない。ふつうなら父というのは、義理の父に好んで接することはないような気がする。だけど母さんが死んでから、じいちゃんと電話で話す父さんの姿を、僕は何度も目撃していた。母さんがいなくなれば赤の他人のような関係なのに、前よりもむしろ、ふたりが仲良くなっているように見えることが、奥歯に挟まった食べかすのように気になっていた。

父さんの後ろから玄関の中をのぞくと、すでにダンボールが六箱積み重なっていた。『着るもの』『洗面』『雑貨』などの文字がひとつずつ、黒のペンで几帳面にダンボールに書かれている。その中に『千代』というのがあった。それを見て、ばあちゃんの名前が千代だったことを思い出した。

「とりあえずこれだけ持って行こうと思ってるんだが」

じいちゃんがダンボールの前に立って言う。僕は父さんの横をすり抜けて、静かにダンボールをひとつ抱えた。あんまり話しかけられたくないときは、力仕事をしているに限る。

「持てるかい、修くん」

まるで小学生に言うかのようなようだった。僕が持ち上げると、大して重くないのに、おお、すごいすごい、とじいちゃんは大げさだった。僕は黙って車に向かった。

ダンボールは二ついっぺんに持てるほど、どれも軽かった。本当に必要最低限といった感じ。父さんと僕であつという間にすべての荷物を車に運び込む。ただ重くはなくても場所はそれなりにとるわけで、シートを動かした車の中は来るときよりも狭く見えた。

一度、家の中に戻っていったじいちゃんを、僕たちは玄関の外で待った。玄関の脇にある花壇には、様々な花がまるで菓子折りのようにぎっしりと咲いている。僕が名前が分かったのは朝顔とひまわりのつぼみぐら이다。そういえば僕たちがここに遊びに来るたびに、ばあちゃんがよく花の名前を教えてくれたっけ。でもそんなことに全く興味のなかった僕は、ほとんど花の名前を覚えることができなかつた。名前が分かるのは、小学校のころに自分で育てたことがあるものぐら이다。

しばらくするとじいちゃんが、年の割りに派手なりュックサックを抱えて出てきた。それに気づいた茜が、じいちゃんのそばにかけより、代わりにリュックを背負った。

「茜ちゃんにまで悪いねえ」

そう言いながらじいちゃんは玄関の鍵を閉める。車に近づきながら、一度だけじいちゃんが家を振り返った。僕もつられて見てみるが、正月に何度かしか来たことのない家だ、じんわりとこみ上げる感情があるわけもなかった。ただ、じいちゃんにとってそうではないだろうということぐらいは、僕にも分かる。旅行に出かけるわけではないのだ。ばあちゃんが施設に行き、じいちゃんも我が家に来る。じいちゃんは今、なにを思っているんだろうか。

帰りの車では助手席にじいちゃんが座り、後ろの席に僕と茜が並んで座った。来るときと同じように高速に乗る。しばらく走ると茜が「腹が減った」と言うので、途中のサービスエリアに立ち寄ることになった。

サービスエリアに入るまで、茜のおかげで会話が途切れることはなく、僕のほうに話がふられることはほとんどなかった。茜がいてくれてよかったなどと、こんなふうに思うなんて、以前にいつ同じように思ったかをまったく思い出せないぐらい、久しぶりのことだった。

サービスエリアのレストランは、お昼よりも少し時間が早いせいか、それほど混んではいなかった。僕は、知ってるやつがいないかどうかを確認するために、ざっと周りを見回す。こんなところで四人で飯を食ってる姿なんて、ダサすぎて見せられない。幸い知ってるやつのは見当たらなかった。

父さんから金を受け取って食券売り場に並んだ。「なににしよっかなあ」と目の前の茜が言う。ふと横を見ると「元気カレー」というポスターが見えた。口に出して注文するには恥ずかしくて少し照れるようなネーミングだけど、食券を買うからあんまり関係ない。僕は元気カレーにすることにした。父さんは親子丼を、茜はハンバーグプレートを買った。じいちゃんは自分のお金できつねうどんを買った。

食券を出すと「元気いっちゃん！」とカウンターで叫ばれて、僕はなんだか恥ずかしい思いをした。元気カレーが一番はじめにできたので、僕がテーブルを確保する。いつもだったら先に食べ始めるところだけど、じいちゃんが一緒なのもあって一応僕なりに気をつけて、みんなの料理ができあがるのを待った。統一感のかけらもない全員の料理がテーブルにのって、茜が「いただきます」と言うと、父さんとじいちゃんがそれに続いた。僕は黙って食べ始めた。

じいちゃんはすぐには箸を持たず、僕と茜を交互に見た。

「ふたりともついこの間までお子様ランチだったのにねえ」

いつの話してんだよ。じいちゃんの中ではまるで時間が止まっている。

「修くんは、勉強はどうだね？」

じいちゃんがいきなり痛いところを突いてきた。

「ぼちぼち」

僕はカレーをほおぼりながら適当にはぐらかした。

「さぞ難しいことを勉強してるんだろうなあ」

じいちゃんのほうも適当なことを言って、そこで初めて、うどんをずるっとすすった。じいちゃんだって、僕の勉強について本気で知りたいわけじゃないだろう。なんとか僕との接点を見出そうって魂胆なんだろうけど、僕のほうはなるべく干渉されたくないわけで、だからふたりの話がかみ合うわけもなかった。

「あのね」と茜が割り込んできた。「お兄ちゃん、勉強なんかぜんぜんしてないよ。きっと私のほうが頭いい」

じいちゃんが笑った。するとそれまで黙っていた父さんが口を開いた。

「それが笑い事でもないですよ。茜の成績は結構いいんですけどね、修市のやつは……この間も三者面談で、そろそろ大学受験を意識し始めたほうがいいと先生にも言われましてね」

僕は茜を横目でにらみつけた。当の本人はまるで悪びれる様子がない。むしろしてやったりといった感じだ。茜は言いたいことだけ言って、黙々とハンバーグを口に頬張った。

父さんの話を聞いて、じいちゃんが笑うのをやめた。

「修くんは将来は何になりたいんだい？」

そんなんまだ分からないよと思いながら、「別に」と僕は答えた。

「そうか、うん、まあ、何も急ぐことはない」

じいちゃんはそれ以上追求することはなかった。

それからは茜のやつが、学校でどんな勉強をしてるだとか、どんな遊びがはやってるだとかを、延々とじいちゃんに聞かせていた。じいちゃんは、茜のつまらない話をうれしそうに聞いている。結局僕は、元気になりきれないまま、元気カレーを食べ終えた。じいちゃんを見ていると食事よりも茜との話に夢中で、僕はすっかりのびていくじいちゃんのうどんを、ぼんやりと見つめていた。

## 先手

我が家に着くと、僕と父さんのふたりで、じいちゃんの荷物を運び入れた。じいちゃんの使う部屋は玄関に一番近い部屋で、六畳の和室だ。ずっと昔に母さんが化粧をするのに使っていた部屋で、今でもこの部屋に入るとそのときの匂いがするような気がする。最近ではすっかり物置となり果てた部屋だった。だから先週の土曜日、一日かけてこの部屋の掃除をさせられたのだ。今はきれいに片付けてあった。

我が家は、僕が小学校に上がるころに両親がローンを組んで購入したものだ。二階立ての新築で、僕はベランダつきの二階の部屋を自分の部屋にもらい、秘密基地のように改造して、庭に向かっては水鉄砲を打ちまくっていた。ベランダから眺める景色は最高で、この町のとっぺんに住んでいるような気分だった。そのとき茜はやっとハイハイができるぐらいの赤ん坊で、そして母さんはこの家に一年と住むこともなく、この世からいなくなった。

荷物を運び入れたあと、父さんがじいちゃんに家の中を案内した。「冷蔵庫にあるものは自由に食べてください」と父さんが言うと、一緒にのぞきこんでいた茜が「このフルーツミックスジュースは私のだけど、おじいちゃんなら飲んでもいいよ」と付け加えた。「茜ちゃんはどうしてそんなに優しいんだろうねえ」とじいちゃんが言った。

とりあえずじいちゃんとのことが一段落した僕は、自分の部屋に戻った。時刻は二時を少し過ぎたところ。僕はケータイを開くと、琴未にメールを送った。

『今から会う？』

すぐに返事が届いた。

『ごめん、今、お母さんと買い物中なの。このあと晩御飯を作るの手伝うから、今日はムリかも』

僕はケータイを閉じ、机の上に置いた。椅子に座りベッドの上に両足を投げ出す。両手を前で組み、目をつぶった。晩御飯の手伝いのときはやっぱり、エプロンをするんだよな。色はピンク。そして濡れた手をエプロンで拭いたりするのだ。味見をしようとお玉で小皿にすくい、小指をつけてなめたりするのだ。一度でいいから、琴未の手料理が食いたいなあ。

僕はふと思いついて椅子から立ち上がった。

窓があるのとは反対側の壁に、勉強をしない僕とはいえ、一応本棚がある。上から下までほぼマンガや雑誌でぎっしりだが、一番下には五巻に分かれた百科事典が置いてある。地震のときなんか倒れてこないよう、本棚の一番下には重いものを置くとよいと聞いたことがあった。そういえばこの百科事典、小学生のころにじいちゃんとばあちゃんが僕に買ってくれたんだ。僕は第三巻『地球と生物』のケースを取り出すと、そこから魅惑的な女性が表紙である本を一冊取り出した。ちなみに百科事典本体は、机の引き出しにしまっている。

僕がベッドに横になりそれを広げたとき、部屋のドアがロックされた。父さんにしろ、茜にしろ、僕の部屋に近づくときは足音で分かるのに、まったく気配がなかった。そしてふと、じ



いちゃんか、と気がついた。

「ちょっと待って」

僕はあわてて、開いていたそれをベッドの下にすべりこませ、空となった百科事典のケースを本棚の元の位置に戻した。ドアを開けると案の定じいちゃんだった。

「ちょっといいかな？」

僕はうなずいた。

じいちゃんは他人の家にあがりこむように、僕の部屋に入ってくる。僕は冷や汗をかきながら、それをさとられまいと普通にふるまった。じいちゃんは僕の勉強用の椅子を指差して「いいかい？」と聞いてくる。僕は必要以上にうなずいた。

じいちゃんが椅子に座り、僕はベッドの上に、じいちゃんと斜めに向き合うように座った。僕が黙っていると、じいちゃんのほうもなんだかそわそわした感じで、ゴホンとわざとらしくせきをしったりした。

「じいちゃんはなあ、その昔、車の販売員をしとった」

はあ？ と僕は心の中で、すつとんきょうな声をあげた。

「月末になると上司から、お前は今月何台売った？ と聞かれる。だが車なんて高いものそう簡単に売れるわけがない。一台も売れない日が何ヶ月も続いた」

僕は事態が飲み込めずにいた。目の前のじいちゃんは目をつぶりながら、半分眠ったかのような調子で話を続ける。

「おれにはこの仕事は向いていないかもしれんと悩んだ時期があった。仕事に行きたくないとも思った。車の営業で、見知らぬ家に飛び込んでも門前払いが普通だ。会ってもらうこともままならんし、なんとか会ってもらえたとしても、そこからどうこうなるわけでもない」

なんなんだ？ 説教か？ 僕がなにかやらかしたのか？

「これではまったく仕事にならないと、じいちゃんはあるとき先輩に相談をした。その人は常に売り上げナンバーワンだったんだ。じいちゃんは、なんでもいいからコツみたいなもんを伝授してもらえないかと、頭を下げた」

ははあ、もしかすると、ボケたのはばあちゃんだけじゃなかったのかもしれない。ボケがうつるとは聞いたことがなかったけれど、目の前のじいちゃんはまるでそうだったかのようだった。これは、父さんには早いとこ伝えておいたほうがよさそうだ。

「そのときに先輩から『まさかお前手ぶらで訪問してるわけじゃないよな』と言われた。そのまさかだったんだよ。『どこの誰が車の営業マンを喜んで招き入れるか』とその人は言う。そうして伝授されたのが、営業で訪問する前に、そのご家庭の近くにある、おいしくて有名な菓子屋を調べ上げるということだった。そして訪問前にはその家で菓子折りを買って行くわけだな。そこ

でのポイントは、高すぎるものを買わないということ」

じいちゃんはそこで僕に向けて人差し指をたてた。これが重要なんだぞと僕にアドバイスするかのよう。まるで僕が何かの教を請うているかのようだ。

「そして訪問先の奥さんにこう言うわけだ。『偶然その店の前を通りかかったらいいにおいがしたもんで。おいしいかどうかは分からないんですが、ちょっと買って見たんですよ』するとびっくりするぐらい話に花が咲く。まるで花さかじいさんにでもなったかのような気分だったなあ。車の話をするのは五分。それより長くても短くてもだめだ。すると不思議なことに後日、向こうから電話がかかってくる」

僕はじいちゃんの話に少し引き込まれながらも、じいちゃんとはあちゃんを同じ施設に入れたら、割引とかあるのかなと考えていた。

「車一台に比べれば、ケーキなんて安いもんだ。さてと、雑談はこのくらいにして」

そう言うとじいちゃんは小さな封筒を取り出した。

「修くん、男の約束を守れるか？」

じいちゃんは僕の返事を待たずに続けた。

「これは、お父さんと茜ちゃんには内緒だ」

そう言ってじいちゃんは封筒を僕に渡した。なんだろうと手にとって中をのぞくと、一万円が入っていた。

「今日がんばってもらったバイト代と、今後かけるであろう迷惑料だ」

僕は啞然として、でもなんとか理性も働いて「こんなの困るよ」と言った。

「困りゃせんよ。お金はいくらあっても困りゃせん」

そう言うとじいちゃんは黄色くなった歯をのぞかせた。そうして僕から逃げるようにして部屋を出て行った。「じいちゃん」と僕が声をかけても、立ち止まることはなかった。

じいちゃんが出て行ったあと、僕はもう一度封筒の中身を見た。うれしいのが七割。現金なもので、あれも欲しかった、これも欲しかったと浮かんできてくる。だけど三割ぐらいはやっぱり困っている。タダより高いものはないとも言うではないか。この福沢さんには何だか呪いのようなものがかけられていて、欲に負けて使ってしまうと、とんでもないことが起こるのではなからうか。

すっかりじいちゃんに先手を打たれたな、という結論に至った。これじゃあ、多少のことは我慢せざるを得ない。もしかするとじいちゃんは、僕が思っているよりよっぽど手ごわい相手なのかもしれない。

## 腐れ縁、武流（たける）

---

「それで、じいちゃんと一緒に住むことになったわけか……あつツ！」

できたてのお好み焼きが想像以上に熱かったらしく、武流が叫んだ。僕と武流は月に一度は行きつけのお好み焼き屋に行く。今日は野球部の練習が休みらしく、学校の帰りに一緒に食に行くことになった。炎天下での練習のせいで、武流は真っ黒になり、黙って歩いていると目玉だけが浮かんでいるように見えた。

我が校の野球部は、進学校ということ差し引いても弱いらしく、甲子園ははるか遠くの、影すら見えないところにあるらしい。それでも野球部のやつらは、僕が放課後にのぞき見している分には気の毒なぐらいまじめにやっている。「甲子園狙えないのになんでそんなにがんばれるんだよ」と武流に聞いたことがあったけど、「お前には、青春が分からんのか」と返されて、それっきりになった。悔しいことに、武流にとっての野球のようなものが、僕にはなかったのだった。

じいちゃんと暮らし始めて、三日が経過した。今のところ特別大きな問題には出くわしてない。ただじいちゃんが気配なく家の中を歩き回るもんだから、別になにを言われるわけもないけれど、落ち着かなかった。

それから僕らの晩御飯をじいちゃんが作るようになり、これがまた信じられないほどヘルシー志向だった。今まではコンビニで弁当を買ったり、スーパーの惣菜だったり、ときどきピザをとったりだったのに、じいちゃんが張り切りだして、昨日の晩御飯は煮魚とひじきのあえたもの、そしてだし巻き卵となった。おとといの晩御飯も似たような感じ。育ち盛りの僕にはとうてい十分と言える代物ではなく、じいちゃんが寝静まったあとにカップ麺を食うのが日課になっている。これでは健康的な食生活になったのかどうか分からない。

「まあさ、でもあれだ、これからの高齢化社会、そういうこともあるわけよ」

武流はこういうふうに、ろくに知りもしないことを、テレビで聞いたセリフそのままにしゃべる男だ。器用だといえば器用なのだけど、その軽々しさと言ったら、無重力状態だ。

「いいよなあ、お前は悩みがなんにもなくて」と僕が言うと「なにを失敬な」と見栄をはってきた。

「事実だろ」

「彼女が、ほしい」

「彼女？ そりゃあ、いたほうがいいけど、お前が思ってるほどいいことばっかじゃねえよ」

僕は最近手も握れていない琴未のことを思った。

「修市、それはお前、宝くじの一等に当たったやつが、二等の賞金でも十分だったんですけどね、っていうぐらいイヤミなことだ」

「なんだそれ」

「お前は平民の気持ちが分からんようになったんだな」

そう言って武流は、マヨネーズで真っ白になったお好み焼きを口に放り込んだ。口の周り、マヨネーズが汚くついている。額のにきびもぶつぶつと活きがよかった。

「俺の夏はさ」

ものが口に入ったまま、武流が言う。

「夏はお前のものじゃねえよ」

「野球しかないんだよ」

「いいだろ、野球があれば」

「夏って言えばお前、ぴちぴち水着や、ぴちぴち浴衣だろ」

ぴちぴち水着はいいとして、ぴちぴち浴衣って……。

「だからさ、琴未ちゃんに友達を連れてきてもらってだな、合コンをだよ……」

始まった。僕が琴未と付き合い始めてから何かといえば合コン、合コン。こんな飢えたやつに女の子を紹介できるわけがないだろ。

「いつも言ってるけどさ、自力で見つけろよ」

「あららららら、修市君、いったい誰のおかげで琴未ちゃんと付き合えるようになったのか、よもや忘れたわけじゃあ、あるめえな」

こいつはきっと死ぬまでこのことを言い続けるのだろう。武流のおかげで琴未と付き合いえたなどと微塵も思ったことはないけれど、告白の場所をセッティングしたのが武流であることは、まあ、事実ではある。

高一の終わりに、武流がふたりでカラオケに行きたいと言い出した。僕は「ふたりで行くなんてごめんだ、第一、おまえ歌下手じゃん」と言うと「だからこそこっそりと練習してみんなを見返すんじゃないか」と真剣に訴えるものだから、仕方ないと付き合いやることにした。

すると当日、『寝坊したから先に店に入って待っててくれ。予約してあるから誰かが歌わんと損をしてしまう』というメールが届き、だから僕はいやだったんだとしぶしぶ部屋に入っていると（もちろんひとりで歌うなどしなかったけど）なんと琴未がやってきたのだ。そして「あれ、春野くん、ひとり？」なんて言うもんだから、座っていたからよいものの、僕は自分の体重を支えきれないくらい足腰が震えまくった。

本当に悔やんでも悔やみきれないことに、琴未のことで頭がいっぱいだった僕は迂闊にも武流にそのことを漏らしていた。それから一週間後のカラオケ騒動だった。琴未を見ていると、どうやら他にもたくさんクラスメイトが来ると思いこんでいるふうだった。しかし、おそらく誰も気

やしないだろうことは想像がついた。初めて見る私服姿の琴未にパニックになっていると、武流からまたメールが届いた。そこには

『男になれ』

とだけ書かれていた。

それから小一時間が経過した。さすがに琴未もなにかがおかしいと思い始めているようだった。僕は意を決し、妄想の中では何度もつぶやいていたことをようやく言葉にし、そうして「友達からなら」という曖昧な返事もらった。

ここで終わっていたなら、百歩譲って武流を許せないことはなかった。ところが！ 琴未に断れなかったというただそれだけに僕が安堵していると、目の前の大きなテーブルの下から拍手が聞こえてきた。そうして武流が四つんばいで姿を現した。

「一時間もかけるやつがいるかよ。もう腰が、たまらん」

と武流は言った。

久しぶりにあの日のことを思い出しながら、僕は黙ってお好み焼きにマヨネーズを追加した。ここの自家製マヨはご飯にかけて食えるようなうまさなのだ。お好み焼きを食いに来ているというより、このマヨを食いに来ているというほうが正しいかもしれない。

武流がまだぶつくさと言っている。

武流がなんと言おうと、今年の夏は琴未と行くところまで行くのだ。去年のようなただ暑いだけの、そばにいるのは男と茜だけのそんなモノトーンの夏休みとは、もうおさらばなのだ。僕は自分に言い聞かせた。